親子教室等に通う保護者の育てにくさ・困り感に関する研究

山原麻郁*・小枝達也**

A study about the difficulties of child care in parents who participated at parent-child class

YAMAHARA Asaka*, KOEDA Tatsuya**

キーワード：子育て支援，育てにくさ，親子教室，発達障害
Key Words: child care support, feeling of difficulty with child care, parent-child class, developmental disorder

Ⅰ．問題と目的

近年では，子育て支援として様々な制度や取り組みが行われているが，一般的な子育て支援の多くは共働き世帯に対するものや一人親家庭に対するもの，虐待防止を目的とするもの等である。育てにくさはあるが，障害の診断がついていない幼児期の子どもをもつ家族，主に母親に対する支援については少ないのが現状である。そこで本研究では，育てにくさや困り感を抱えた保護者は具体的にどのようなことに困っているのかを明らかにし，今後の子育て支援等を考える上での参考とすることを目的する。

これまで保護者に対する支援は育児困難，育児不安をキーワードとして進められてきた。保育小辞典によると，育児困難とは「家庭での日常的な育児が困難になっている状態のこと。」であり，育児不安とは「育児を担当するおとなが抱く，疲労感，気力・育児意欲の低下，いらいら，育児に関する不安，自信のなさ，社会からの独立感などの総称。」として記されている[1)]。そしてこれらの背景には，①子育て世代が核家族化し地域のつながりが薄くなり，母親ひとりが育児を中心的に担わなければならない状態，②子育て文化が伝承されにくい状態，③子どもが障害や育てにくい特性をもつ場合，④経済的に困難な生活状況，⑤仕事と子育ての両立が難しい状況，等があるとされている。本研究では③に含まれる「子どもが育てにくい特性をもつ場合」に焦点を当てる。

首都圏，地方都市，地方郡部の幼稚園児及び保育園児をもつ保護者を対象に行った第 3 回子育て生活基本調査(幼児版)(2008)では，子育ての悩みや気がかりについて「犯罪や事故に巻き込まれること」が 73.3％で最も多く，次いで「褒め方，叱り方」55.3％，「しつけの仕方」52.4％でこれら 3 項目が半数を超えて回答していた。子どもの育てにくい特性に関すると思われる「子どもの性格，態度や様子」については 39.4％となっていた[2)]。また，永田(2011)は ASD が疑われる乳幼児期の子どもを抱えた親は，同年代の子どもをもつ母親に比べて抑うつの陽性率が高く，育児ストレスも全般的に高いことを指摘している[3)]。このことからも，障害が疑われる幼児期の子どもをもつ保護者は子どもの育てにくさに気づき，何らかの困り感を抱えていることが考えられる。田丸，小枝(2010)の調査では，5 歳児発達相談に来談した対象児の半数が幼児期の育てにくさを振り返って「指示の

*鳥取大学地域学部地域教育学科
**鳥取大学地域学部地域教育学科

入りにくさ」,「癇癪」,「落ち着きのなさ」をあげていたことがわかっている[4)]。またその中で発達障害との診断を受けた事例を取り出すと，注意欠陥多動性障害児や広汎性発達障害児の事例ほとんどが先の 3 項目特に「指示の入りにくさ」,「落ち着きのなさ」を幼児期の育てにくさとして振り返っており，養育上の困難さがうかがわれたと報告している。このことからも，幼児期の育てにくさに注目した研究を行うことは障害の早期発見に繋がるだけでなく，保護者の適切な関わりや子どもの発達によい影響を与えるのではないかと推察され，今後の子育て支援等を考える上での参考となると思われる。

II. 方法

1. 調査対象

鳥取県鳥取市中央保健センター実施のふれあい教室りすクラス(1 歳 6 ヶ月児)･ぞうクラス(3 歳児), 5 歳児発達相談及び鳥取県鳥取市こども発達・家庭支援センター実施のらっこクラス対象児の保護者，計 85 名を対象とした。

ふれあい教室のりすクラス及びぞうクラスはそれぞれ 1 歳 6 ヶ月児健康診査，3 歳児健康診査の結果「要追跡観察」とされた幼児や育児不安をもっている保護者に対し，遊びを中心とした親子の関わりを体験すると共に集団的あるいは個別的な助言・指導を行うことにより，養育者の不安を軽減し，乳幼児の心身のより健全な発達を促すことを目的とした親子教室であり，らっこクラスは乳幼児健康診査後の経過の中で障害の疑いがあり，ある程度発達の見極めが得られた児とその保護者を対象に，療育的な活動を取り入れた小集団での遊びを体験すると共に子どもの特徴をふまえた支援を行うことや療育の場への橋渡しを行うことを目的とした親子通所療育教室である。

2. 調査期間

2013 年 7 月から 12 月に開催された各教室及び 5 歳児発達相談にて実施した。

3. 調査方法

ふれあい教室では座談会にて，保健センター実施のアンケートに回答する際に併せて本アンケート記入を依頼し，その場で回答してもらう方法をとった（自記式調査）。5 歳児発達相談では，待ち時間を利用して保護者に本アンケート記入を依頼し,その場で回答してもらう方法をとった（自記式調査）。らっこクラスでは，保護者交流会の際，本アンケート記入を依頼し，その場で回答してもらう方法をとった（自記式調査）。いずれも書面にて本研究への同意を得たもののみを集計の対象とした。

4. 調査内容

子どもの属性(年齢，性別，出生順位，きょうだい構成)，記入者の属性(子どもとの続柄，年齢，職業形態，家族形態)，日常的な子育てサポートの有無とその相手，日常的な子育て相談相手の有無とその相手，子どもを育てる上で育てにくいと感じること(自由記述)，子どもを育てる上で困っていること(自由記述)，現在の困り感レベル(8 月実施分から本項目を追加)を設定した。

5. 回収数

対象者 85 名全員から回答を回収し，その内本研究への同意が得られたものは，ふれあい教室りすクラス 18 名，ふれあい教室ぞうクラス 13 名，5 歳児発達相談 35 名，らっこクラス 9 名の合計 75 名(同意取得率 88%)であった。

6. 分析方法

得られたデータについての単純集計は Excel にて，子どもや記入者の属性と困り感との関連性について SPSS を用いて t 検定を行った。

Ⅲ．結果及び考察

各項目の集計を表 1 に示す。ただし，ふれあい教室かららっこクラスへ移行した 3 名分については重複している。

1. 子どもの性別

子どもの性別は男児 53 名(70.7%)，女児 22 名(29.3%)であった。対象群別では，りすクラスは男児 14 名(77.8%)，女児 4 名(22.2%)，ぞうクラスは男児 7 名(53.8%)，女児 6 名(46.2%)，5 歳児発達相談は男児 26 名(74.3%)，女児 9 名(25.7%)，らっこクラスは男児 6 名(66.7%)，女児 3 名(33.3%)であった。ぞうクラスを除いて男児が 6～7 割と多くなっており，保健師によると，調査期間以外でもどの対象群も比較的男児がほうが多いようだ。しかし，今回の調査においてぞうクラスで男女比がほぼ同じであることは，発達に遅れはないが，わがままさや気の強さにより母親が 1 人で子育てをするには困難な場合が数件含まれており，子どもに素因があるというよ

表 1　対象者の属性　　単位：人(%)

	選択肢	りす n=18	ぞう n=13	5相 n=35	らっこ n＝9	全体 n＝75
子どもの性別	男児	14 (77.8)	7 (53.8)	26 (74.3)	6 (66.7)	53 (70.7)
	女児	4 (22.2)	6 (46.2)	9 (25.7)	3 (33.3)	22 (29.3)
子どもとの続柄	母	16 (88.9)	12 (92.3)	33 (94.3)	9 (100.0)	70 (93.3)
	父	0 (0.0)	1 (7.7)	1 (2.9)	0 (0.0)	2 (2.7)
	祖母	2 (11.1)	0 (0.0)	1 (2.9)	0 (0.0)	3 (4.0)
記入者の年齢	20代	8 (44.4)	2 (15.4)	7 (20.0)	2 (22.2)	19 (25.3)
	30代	8 (44.4)	8 (61.5)	24 (68.6)	4 (44.4)	44 (58.7)
	40代	1 (5.6)	3 (23.1)	3 (8.6)	3 (33.3)	10 (13.3)
	その他	1 (5.6)	0 (0.0)	1 (2.9)	0 (0.0)	2 (2.7)
職業形態	専業主婦	12 (66.7)	10 (76.9)	6 (17.1)	8 (88.9)	36 (48.0)
	常勤	1 (5.6)	1 (7.7)	16 (45.7)	0 (0.0)	18 (24.0)
	非常勤	1 (5.6)	0 (0.0)	2 (5.7)	0 (0.0)	3 (4.0)
	パート	1 (5.6)	1 (7.7)	6 (17.1)	0 (0.0)	8 (10.7)
	休職中	3 (16.7)	1 (7.7)	5 (14.3)	1 (11.1)	10 (13.3)
家族形態	核家族	13 (72.2)	12 (92.3)	19 (54.3)	5 (55.6)	49 (65.3)
	拡大家族	4 (22.2)	1 (7.7)	16 (45.7)	3 (33.3)	24 (32.0)
	その他	1 (5.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (11.1)	2 (2.7)
サポートの有無	有	12 (66.7)	6 (46.2)	32 (91.4)	6 (66.7)	56 (74.7)
	無	6 (33.3)	7 (53.8)	3 (8.6)	3 (33.3)	19 (25.3)
相談相手の有無	有	16 (88.9)	9 (69.2)	32 (91.4)	8 (88.9)	65 (86.7)
	無	2 (11.1)	4 (30.8)	2 (5.7)	1 (11.1)	9 (12.0)
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.9)	0 (0.0)	1 (1.3)

(5 相：5 歳児発達相談　以下，図表中では 5 相と示す)

りも母親の困り感が強いためにふれあい教室に参加していることが要因であると考えられる。また，対象児の性別によって困り感レベルに差があるかをみたところ，男児 3.8(n=43)，女児 3.2(n=15)であり，有意差はみられなかった。

2. 子どもとの属性

子どもとの属性では母親が最も多く 70 名(93.3%)，次いで祖母 3 名(4.0%)，父親 2 名(2.7%)であった。対象群別では，りすクラスは母親 16 名(88.9%)，祖母 2 名(11.1%)，ぞうクラスは母親 12 名(92.3%)，父親 1 名(7.7%)，5 歳児発達相談は母親 33 名(94.3%)，父親 1 名(2.9%)，祖母 1 名(2.9%)，らっこクラスは母親 9 名(100%)であった。今井，常盤(2011)の調査で育児書等でも子育ての中心は母親とされていることを指摘していることから[5]，親子教室や乳幼児健康診査等は母親が同伴するものであるという社会的な風潮も考えられるだろう。また，両親で参加した場合でもアンケート記入は母親が行っていたため，母親の割合が高くなったと思われる。

3. 同伴者（アンケート記入者）の年齢

同伴者の年齢は 30 代が最も多く 44 名(58.7%)，次いで 20 代 19 名(25.3%)，40 代 10 名(13.3%)，その他 2 名(2.7%)であった。対象群別ではりすクラスは 20 代 8 名(44.4%)，30 代 8 名(44.4%)，40 代 1 名(5.6%)，その他 1 名(5.6%)，ぞうクラスは 20 代 2 名(15.4%)，30 代 8 名(61.5%)，40 代 3 名(23.1%)，5 歳児発達相談は 20 代 7 名(20.0%)，30 代 24 名(68.6%)，40 代 3 名(8.6%)，その他 1 名(2.9%)，らっこクラスは 20 代 2 名(22.2%)，30 代 4 名(44.4%)，40 代 3 名(33.3%)であった。これは子どもとの属性が母親・父親から祖母にまで渡っていたため，年齢層も幅広くなったと言える。しかし，同伴者の年齢と困り感レベルの関係をみたところ，20 代 3.8(n=16)，30 代 3.5(n=34)，40 代 3.7(n=9)であり，有意差はみられず，困り感に関しては同伴者の年齢は関係がないと考えられる。

4. 職業形態

職業形態は専業主婦 36 名(48.0%)，常勤 18 名(24.0%)，休職中 10 名(13.3%)，パート 8 名(10.7%)，非常勤 3 名(4.0%)であった。対象群別では，りすクラスは専業主婦 12 名(66.7%)，常勤 1 名(5.6%)，非常勤 1 名(5.6%)，パート 1 名(5.6%)，休職中 3 名(16.7%)，ぞうクラスは専業主婦 10 名(76.9%)，常勤 1 名(7.7%)，パート 1 名(7.7%)，休職中 1 名(7.7%)，5 歳児発達相談は専業主婦 6 名(17.1%)，常勤 16 名(45.7%)，非常勤 2 名(5.7%)，パート 6 名(17.1%)，休職中 5 名(14.3%)，らっこクラスは専業主婦 8 名(88.9%)，休職中 1 名(11.1%)であった。全体を通して専業主婦の割合が高くなっているが，これはふれあい教室が幼稚園や保育園に通っていない子どもを対象としているために専業主婦の割合が高くなっていると考えられる。またらっこクラスは週 1 回の親子通園であるため，利用者は専業主婦の母親が多いと思われる。また，職業形態別に困り感レベルを比較したところ，専業主婦 3.7(n=29)，常勤 3.7(n=15)，非常勤 4.3(n=3)，パート 3.4(n=7)，休職中 3.4(n=7)であり，有意差はみられなかった。このことから，職業形態と育てにくさには関連はないと思われる。

5. 家族形態

家族形態は核家族(親子のみ)49 名(65.3%)，拡大家族(親子＋祖父母等)24 名(32.0%)，その他 2 名(2.7%)であった。対象群別では，りすクラスは核家族 13 名(72.2%)，拡大家族 4 名(22.2%)，その他

1 名(5.6%)，ぞうクラスは核家族 12 名(92.3%)，拡大家族 1 名(7.7%)，5 歳児発達相談は核家族 19 名(54.3%)，拡大家族 16 名(45.7%)，らっこクラスでは核家族 5 名(55.6%)，拡大家族 3 名(33.3%)，その他 1 名(11.1%)であった。家族形態は全国と比べて拡大家族の割合が高くなっている。平成 22 年の国勢調査で全国の三世帯同居率は 7.1%であるのに対し，鳥取県は 14.8%であった。本研究でも拡大家族(三世帯同居)の割合は 32.0%と高くなっており，鳥取県の家族形態の特徴と言えるだろう。また，家族形態による困り感レベルは，核家族 3.9(n=36)，拡大家族 3.5(n=23)であり，有意差はみられなかったことから，子どもを育てる上で核家族であるか拡大家族であるかはさほど重要な問題ではないと思われる。

6. 日常的な子育てのサポートの有無とその相手

日常的に子育てのサポートをしてくれる人がいると回答した人は 56 名(74.7%), いないと回答した人は 19 名(25.3%)であった。対象群別では，りすクラスはサポート有り 12 名(66.7%)，サポート無し 6 名(33.3%), ぞうクラスはサポート有り 6 名(46.2%)，サポート無し 7 名(53.8%)，5 歳児発達相談はサポート有り 32 名(91.4%)，サポート無し 3 名(8.6%)，らっこクラスはサポート有り 6 名(66.7%)，サポート無し 3 名(33.3%)であった。日常的に子育てのサポートが有ると答えた 56 名のうち, その相手としては母方の祖父母が最も多く 33 名であった。対象群別では，りすクラスは 12 名のうち母方の祖父母 9 名，父方の祖父母 4 名，その他 1 名，ぞうクラスは 6 名のうち母方の祖父母 5 名，父方の祖父母 1 名，父親 1 名，5 歳児発達相談は 32 名のうち母方の祖父母 16 名，父方の祖父母 13 名，父親 4 名，その他 1 名，らっこクラスは 6 名のうち母方の祖父母 3 名，父方の祖父母 1 名，父親 2 名，その他 1 名であった(図 1)。

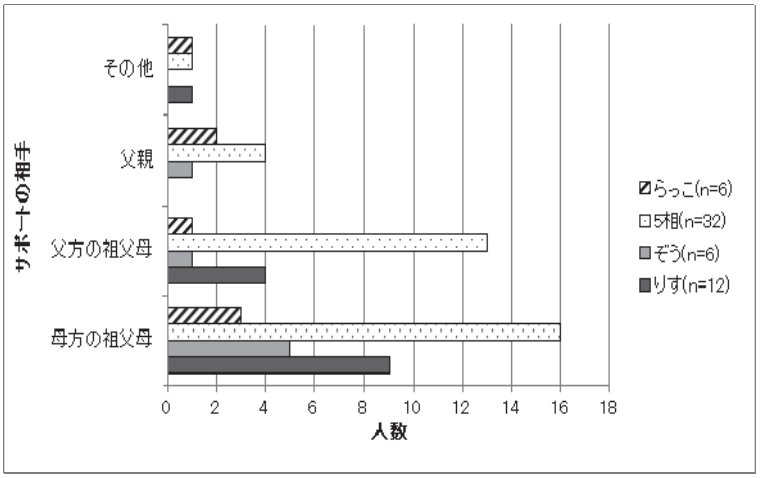

図 1　日常的な子育てのサポートの相手（複数回答）

日常的に子育てサポートをしてくれる人はりすクラス，らっこクラス，5 歳児発達相談で有りと回答した人が多く，1 歳 6 ヶ月児のりすクラスでは両祖父母，あるいはどちらかの祖父母からのサポートを受けている。このことから，1 歳 6 ヶ月頃は子育てにはまだまだ手のかかる時期として祖父母も捉えており，積極的にサポートをする時期である考えているのではないだろうか。

一方，ぞうクラスは 3 歳児対象であり，一般的に 3 歳を過ぎると子どもの食事や排泄等も自立してくるため，祖父母がサポートから離れる時期と考えることができる。5 歳児発達相談で有りと回答した人が多くなっていることは，拡大家族である割合が高いことや，母親が仕事をしている割合が高いことから，祖父母等からの子育てサポートを受けている理由が考えられる。第 4 回全国家庭

動向調査(2008)で平日の昼間，第 1 子が 1 歳から 3 歳になるまでの世話をしている相手という項目において，優先順位 1 位は母親(75.3%)であるが 2 位は祖父母(45.2%)となっており，祖父母を優先順位 1 位とあげた人も 13.8%と母親に次いで多くなっている。また同調査で祖父母，父親を含めた親族に頼る人は 91.1%，非親族 0.4%，公的機関 8.2%となっており [6]，このとのことからも，子育てのサポートの相手としては母方の祖父母や父方の祖父母といった親族が多く挙がっており，子どもを預かってもらう等の実際的に子どもと関わってもらうサポートは他人には頼らない傾向があると思われる。

7. 日常的な子育ての相談相手の有無とその相手

日常的な子育ての相談相手がいる人は 65 名(86.7%)，いない人は 9 名(12.0%)であった。対象群別では，りすクラスは相談相手有り 16 名(88.9%)，相談相手無し 2 名(11.1%)，ぞうクラスは相談相手有り 9 名(69.2%)，相談相手無し 4 名(30.8%)，5 歳児発達相談は相談相手有り 32 名(91.4%)，相談相手無し 2 名(5.7%)，らっこクラスは相談相手有り 8 名(88.9%)，相談相手無し 1 名(11.1%)であり，日常的な子育ての相談相手はどの対象群でも有りと回答した人が多くなっていた。健やか親子 21 第 2 回中間評価(2009)の報告でも，育児について相談相手のいる 1 歳 6 ヶ月児及び 3 歳児の母親の割合は 9 割を超えている [7]。このことからも，実際に子どもと関わるサポートとは異なり，日常会話の延長として相談は行いやすいのではないかと考えられる。日常的に子育ての相談相手がいると答えた 65 名のうち，その相手としては母方の祖父母が最も多く 44 名であった。対象群別では，りすクラスは 16 名のうち母方の祖父母が 13 名，ママ友 3 名，友人が 2 名，父方の祖父母 2 名，自分のきょうだい 1 名，父親 1 名，その他 1 名，ぞうクラスは 9 名のうち母方の祖父母 5 名，友人 4 名，ママ友 3 名，自分のきょうだい 2 名，5 歳児発達相談は 32 名のうち母方の祖父母 21 名，友人 10 名，ママ友 8 名，自分のきょうだい 6 名，父親 6 名，父方の祖父母 1 名，その他 3 名，らっこクラスは 8 名のうち母方の祖父母 5 名，ママ友 3 名，友人 2 名，父方の祖父母 2 名，父親 1 名，その他 3 名であった(図 2)。相談相手は祖父母等の親族だけでなく，信頼関係のある友人や同じ境遇であるママ友という回答が多かった。第 4 回全国家庭動向調査でも，出産や育児で困ったときの相談相手は優先順位 1 位及び 2 位ともに祖父母が最も多くあげられている。また，同調査で約 3 割の母親が優先順位 4 位までに父親をあげていない一方，優先順位 3 位，4 位では友人等を含む非親族が 3 割から 4 割で最も多くなることがわかった。実際的なサポートは父方の祖父母でも相談は母方の祖

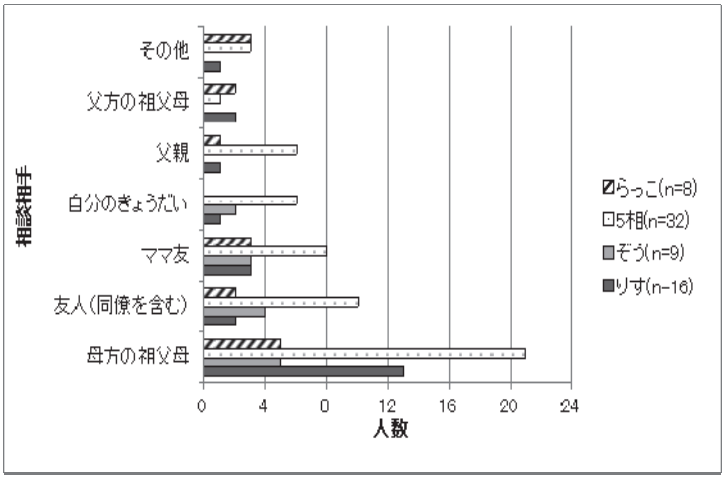

図 2　日常的な子育ての相談相手（複数回答）

父母などという回答から，相談相手には話しやすい存在であるかや信頼関係があるかが重要となっていると考えられる。

8. 子育てのサポート及び相談相手の有無と困り感レベルの関係

子育てのサポート及び相談相手の有無と困り感レベルの関係をみたところ，サポート及び相談相手ともに無しと回答した人の平均は 3.8(n=4)，サポートは無いが相談相手はいると回答した人の平均は 4.1(n=12)，サポートは有るが相談相手はいないと回答した人の平均は 2.9(n=3)，サポート及び相談相手ともに有りと回答した人の平均は 3.6(n=41)であり，いずれも有意差はみられなかった(表 2)。

表 2　子育てのサポート及び相談相手の有無と困り感レベルの関係

困り感の平均値(cm)	子育てのサポート	
子育ての相談相手	無	有
無	3.8	2.9
有	4.1	3.6

9. 対象群別にみた日常的な子育てサポートの有無と困り感レベルの関係

対象群別に子育てサポートの有無と困り感レベルの関係をみると，りすクラス，ぞうクラス，らっこクラスではサポート無しと回答した人のほうが困り感レベルの平均が高くなっていた。5 歳児発達相談は，サポート有りと回答した人のほうが困り感レベルの平均が高くなっていた(図 3)。どの群でも平均点に差があるように思われたが，いずれも有意差はみられなかった。

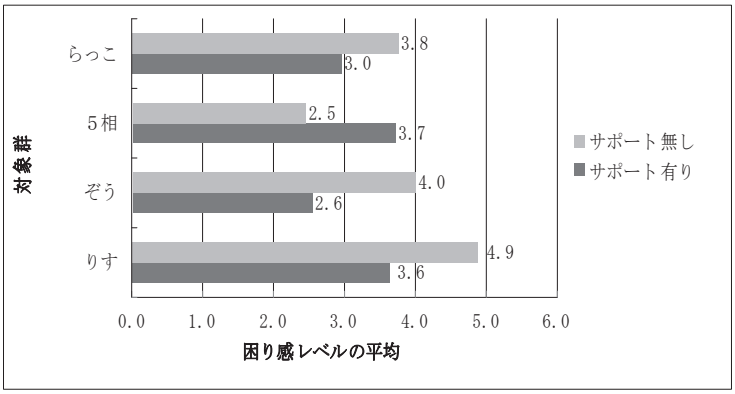

図 3　対象群別にみた日常的な子育てサポートの有無と困り感レベルの関係

10. 子どもを育てる上で育てにくいと感じること及び困っていること（自由記述）

子どもを育てる上で育てにくいと感じること及び困っていることを自由に記入してもらい，筆者がカテゴリーに分類し，まとめた(表 3)。

子どもを育てる上で育てにくいと感じることとして，全体では「自己主張が強い・指示が入らない」が最も多く 18 名，次いで「多動・衝動的に行動する」11 名，「子育て環境に関すること」9 名，「癇癪」8 名，「特になし」6 名と続いた。対象群別に見ると，りすクラスは「多動・衝動的に行動する」，「子育て環境に関すること」，「人・場所見知り」が同率で最も多くそれぞれ 3 名であった。ぞうクラスは「自己主張が強い・指示が入らない」が最も多く 5 名，5 歳児発達相談でも「自己主張が強い・指示が入らない」が最も多く 11 名であった。らっこクラスでは「発達の遅れ」4 名で最も多かった。

子どもを育てる上で困っていることとして，全体では「自己主張が強い・指示が入らない」が最も多く 10 名，次いで「子育て環境に関すること」，「特になし」，「発達の遅れ」が同率でそれぞれ 8

名，「他児とのトラブル・集団での関わり」，「多動・衝動的に行動する」が同率でそれぞれ 7 名と続いた。対象群別の上位項目では，りすクラスは「発達の遅れ」，「危険行為」が同率でそれぞれ 4 名で最も多かった。ぞうクラスでは「子育て環境に関すること」，「発達の遅れ」，「きょうだいとの関わり」，「癇癪」が同率でそれぞれ 2 名であった。5 歳児発達相談は「特になし」が最も多く 8 名であった。らっこクラスでは「発達の遅れ」が 3 名となっていた。

表 3　対象群別の育てにくさ及び困っていることの上位項目

対象群	育てにくいこと	困っていること
りす	①多動・衝動的に行動する，①人・場所見知り	①発達の遅れ，①危険行為
ぞう	①自己主張が強い・言うことを聞かない	①発達の遅れ，①きょうだいとの関わり（喧嘩・比較），①癇癪
5 相	①自己主張が強い・言うことを聞かない	①特になし，②他児とのトラブル・集団との関わり，②多動・衝動的に行動する
らっこ	①発達の遅れ	①発達の遅れ

（①：1 位，②：2 位）

このことから，子どもを育てる上で育てにくいと感じること及び困っていることは，全体に共通するキーワードと対象群によって異なるキーワードがあることが明らかとなった。

りすクラスは「発達の遅れ」「危険行為」「人・場所見知り」「子育て環境に関すること」があげられた。座談会等での話からも，言葉が遅い，オムツが取れない等の発達の遅れを主訴とする保護者が多く，また飛び出しや何でも口に入れる，高いところに登る等の危険行為への対応に困っているようだった。りすクラスの傾向として，発達の遅れを保護者も認識してふれあい教室に通ってきていることから，困り感レベルが 4.0 と高くなっていると思われる。また，近所に同年齢の子どもがいない，公園や室内で遊ばせる場所が少ない等，子どもの遊び場や同年齢の子供同士の関わりの大切さを認識しつつも，実行できない環境に困り感を抱えていることが考えられる。

ぞうクラスでは，「自己主張が強い・指示が入らない」，「癇癪」，「きょうだいとの関わり」，「子育て環境に関すること」があげられた。育てにくいこととして「自己主張が強い・指示が入らない」ことが多くあげられたが，このこと自体では困っているわけではないようで，自己主張が強いことが引き金となり，癇癪やきょうだい喧嘩になるように思われた。また，きょうだい喧嘩だけでなく，きょうだいと比較して育てにくさを感じ，困り感を抱えている場合もあった。ぞうクラスは困り感レベルの母数が少ないため，一概には言えないが，困り感レベルは 5 付近あるいは平均以下のどちらかであり，平均付近の分布はないという特徴がある。子どもに素因があり，尚且つ保護者の不安や困り感が強くてふれあい教室に参加している場合と，保護者からの困り感はないが 3 歳児健診で要追跡観察となりふれあい教室に参加している場合で，困り感レベルがはっきりと分かれるような結果となったと言える。「子育て環境に関すること」は，りすクラスとは内容が異なり，気軽に預かってもらえる場所がない等があげられ，子育てのサポートをしてくれる人の存在や気兼ねなく預けることができる託児所等の必要性が，サポート有り 2.6，サポート無し 4.0 という困り感レベルの結果からも示唆された。しかし，これらの結果について有意な差は認められなかった。

5 歳児発達相談では，「自己主張が強い・指示が入らない」，「他児とのトラブル・集団での関わり」，

「多動・衝動的に行動する」,「子育て環境に関すること」，そして困っていることは「特になし」となっていた。育てにくいこととして「自己主張が強い・指示が入らない」ことが最も多くあげられたが，困っていることでは「特になし」が最も多くなる結果となった。これは育てにくさは抱えているものの，家庭生活の中では困っておらず，幼稚園や保育園等の集団生活の場で「他児とのトラブル，集団との関わり」という面で困り感が浮かび上がってくると考えられる。田丸，小枝(2010)も家庭と集団生活の場での様子が食い違うために，発達上の問題としてつかむことが難しい上，子どもの育ちに関わる人の間で共通理解が得にくいという問題を生じさせてきたと指摘しているように[4]，何らかの主訴をもって参加するはずの5歳児発達相談で困っていることが「特になし」という結果となることは，幼稚園や保育園からの紹介で5歳児発達相談へ訪れているケースが多いと考えられる。また，授業中にじっと座っていられるか心配等，就学に向けて多動な面を心配していることが困り感としてあげられたことは5歳児の特徴であると言える。「子育て環境に関すること」では，小学校の情報が少ないや仕事を休みにくい等，他の対象群とは異なる内容となっていた。これは5歳児発達相談が就学前の時期であることや働いている保護者の割合が多いことが要因であると考えられる。また，困り感レベルが他の対象群とは異なってサポート有りのほうが高いことは，5歳児発達相談に訪れた保護者の困り感はサポートの有無によって左右されるものではなく，集団生活によって明らかとなったり増大したりするものであることや，子どもの行動特性の程度が重いために，サポートがあっても困り感が減少しないということが考えられる。あるいは，有意差が認められなかったことから，本研究における対象群での偶然の結果かもしれない。

らっこクラスでは「発達の遅れ」,「子育て環境に関すること」があげられた。発達の遅れの中でも特に言葉の遅れが目立った。言葉が出ないため子どもの思いをわかってあげられない等，言葉の遅れそのものに困っているのではなく，言葉が出ないことによって意思疎通が図りにくいことが困り感となっているように思われる。「子育て環境に関すること」では対象児の子育てに関して周囲と意見が食い違うことや近くに同年齢の子どもがいないこと，安心して遊ばせることのできる場所がない等，家庭の環境から遊び場まで幅広くなっていた。らっこクラスは療育教室であるため，ふれあい教室よりも子どもの素因がより顕著であり，子どもの特性を理解して育てていこうとする母親の姿勢と家族の理解が得られないことが困り感へ繋がっているようにも思われる。一方で，困り感のレベルはどの群よりも低く，サポートの有無にも差がみられず，保護者からも特性はあるが困ってはいないという声が多くあった。しかし，困り感は高いか低いかの両極となっており，これは子どもの特性について理解し，子どもに対する見方が変わることで困り感が低くなると考えられる。

11. 自由記述項目と困り感レベルの関係

全体を通して，困り感レベルが平均値の2SD以上である6以上であった人の自由記述項目をみたところ，育てにくいと感じることとして無回答を除いたすべての人に「多動・衝動的に行動する」が含まれていが，困っていることでは共通項目はみられなかった。ここで注意すべきことは，「多動・衝動的に行動する」という項目が記載されていると，かならず困り感レベルが6以上になるというわけではない。このことを踏まえ，保護者の抱える困り感の誘引は複雑であり，保護者の受け止め方によるものも大きいと言わざるを得ない。らっこクラスの結果から，子どもの素因がより顕著であるからといって保護者が困っているとは言えない。むしろ，要因のはっきりとしない幼児期の危険行為や自己主張の強さに困り感を抱えている傾向があると言えるだろう。

12. 現在の困り感レベル

10cm の横線を用意し，何も困っていることがない状態を 0，明日からの生活も立ち行かないほど困っている状態を 10 とした場合，現在の困り感に当たる位置に線を引いてもらい，0 から回答者の線までの長さを図り測定して数値化した。回答を得た 58 名の困り感レベルの平均は 3.7 であった。対象群別では，りすクラス 4.0(n=17)，ぞうクラス 3.5(n=6)，5 歳児発達相談 3.6(n=26)，らっこクラス 3.2(n=9)であった。また，困り感の分布をみると，0 から 7 までばらつきがあることがわかる(図 4)。

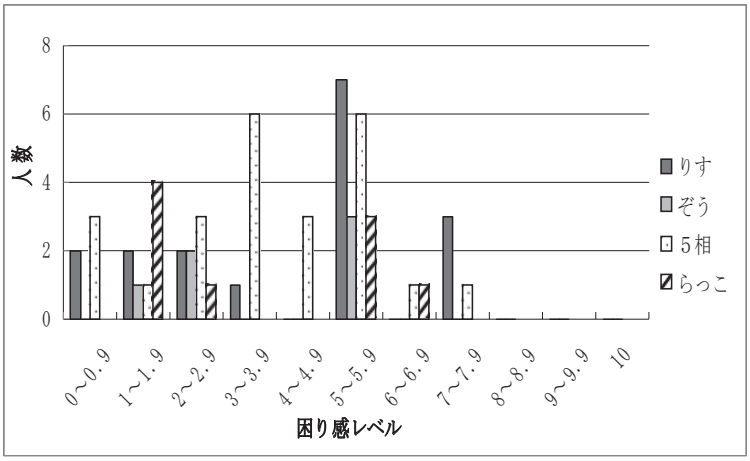

図 4　対象群別困り感レベルの分布

13. 出生順位と困り感レベルの関係

対象となる子どもの出生順位によって困り感レベルに差があるかをみると，1 人っ子の困り感レベルの平均は 4.1(n=25)，きょうだいのいる第 1 子の困り感レベルの平均は 3.6(n=19)であり，第 2 子以降の困り感レベルは 2.0(n=16)であった。このうち，1 人っ子は第 2 子以降の困り感レベルと比較して高くなるという有意な傾向を示していた。第 3 回子育て生活基本調査(幼児版)でも，第 2 子以降と比較して第 1 子のほうが子どもに対する否定的な行動(叱る，たたく)や母親の否定的な感情(イライラ，不安，落ち込む)を抱くと報告されていることから [2)]，対象児が 1 人っ子である保護者は初めての育児での不安が困り感レベルを高くしていると考えられる。一方で対象児が第 2 子以降の保護者は，第 1 子での子育て経験を生かしたり，子どもの成長に見通しがもてたりすることが困り感レベルを低くしていると思われる。

13. きょうだい構成と困り感レベルの関係

対象児が 3 人きょうだいの真ん中である場合などは，年上のきょうだい，年下のきょうだいともに属し，データが重複している。

きょうだいのいる第 1 子では，弟がいる場合の困り感レベルの平均は 4.7(n=11)，妹がいる場合は 2.8(n=10)であり，弟がいる場合の困り感レベルが有意に高くなっていた。

また，第 2 子以降を年上のきょうだい別に比較し

表 4　きょうだい構成による困り感レベルの比較

きょうだい構成	困り感レベル	
兄 - 男児　n=5	1.8	**
姉 - 男児　n=7	4.6	
弟 - 男児　n=9	4.8	***
妹 - 男児　n=5	1.7	

(** : p<0.01，*** : p<0.001)

たところ，兄がいる場合の困り感レベルの平均は 1.8(n=7)，姉がいる場合は 4.0(n=9)であり，姉がいる場合の困り感レベルが有意に高くなっていた。さらに，対象児の性別にきょうだい構成と困り感レベルについてみたところ，対象児が男児である場合において有意差がみられた(表 4)。年上のきょうだいでの比較では，兄がいる場合が 1.8(n=5)，姉がいる場合は 4.6(n=7)であり，姉がいる場合の困り感レベルが有意に高くなっていた。また，年下のきょうだいでの比較では，弟がいる場合は 4.8(n=9)，妹がいる場合は 1.7(n=5)で，弟がいる場合の困り感レベルが有意に高くなっていた。対象児が女児である場合には，いずれも有意な差はみられなかった。従って，きょうだい構成が「姉 - 男児」,「男児 - 弟」の組み合わせである場合において困り感レベルが有意に高くなることが明らかとなり，きょうだい構成によって困り感レベルに有意な差がみられた。母親にとって異性である男児の育児は接し方が分かりづらく難しいと解釈できることから，対象児が男児である場合は困り感レベルが高くなると示唆される。また，同姓の年上のきょうだいの行動をモデルとして年下のきょうだいが真似ると考えられることから，育てにくい素因のある対象男児の行動を弟がモデルとして真似ることによって困り感レベルが高くなることも推察される。「兄 - 男児」の組み合わせと比較して「姉 - 男児」の組み合わせのほうが困り感レベルが高くなっていることは，女児である姉を第 1 子として育てた母親は第 2 子である男児の対象児を育てる上で，姉の育児と比較してしまうため困り感が高くなっていると考えられる。また,「男児 - 妹」の組み合わせよりも「男児 - 弟」の組み合わせのほうが困り感レベルが高くなっていることは，対象児の素因による育てにくさと弟の母親にとって異性であるという育てにくさが加わったことによって高くなっていると考えられる。一方で,「男児 - 弟」と同様に男児だけの組み合わせである「兄 - 男児」では困り感レベルが低くなっており，男児だけの組み合わせが困り感レベルを高くするとは言えない。これは，男児である兄の育児での経験を対象児に生かすことができるために困り感レベルが低くなっていると解釈できるかもしれない。きょうだい構成に着目した先行研究は見当たらないが，興味深い結果であるため，今後これらの要因を明らかにしていく必要がある。

Ⅳ．総合考察

我国の子育て支援は少子化対策に重点が置かれてきた。仕事と子育ての両立を支援することを目的として様々な取り組みが行われてきたが，少子化に歯止めはかかっていないのが現状である。政府は，2013 年少子化危機突破のための緊急対策において，出産や子育て支援だけでなく，家族形成に関する国民の希望が叶えられない阻害要因を解消することに焦点をあてた少子化対策に舵を切ったばかりである。加えて，子ども・子育て新制度が導入されることから，これからの子育て支援に注目したい。

これまでに取り組まれてきた子育て支援には，保護者の感じている育てにくさに対する支援は少ない。育児不安に対する支援は母子保健サービスの中でこれまでにも行われてきたが，育てにくさと育児不安とでは重なる部分もあるだろうが，同一視することはできないと考える。永田(2010)は，子どもの発達に不安を感じている保護者に対し，子育て支援という枠組みで見たときには次の 2 つのパターンがあると述べている[8)]。1 つは子どもの発達上の問題があまり大きくはなくて，例えば遊び広場や親子広場で，こういうふうに育児をしていくといいですよと親に伝える形で乗り切っていける力のある親という組み合わせである。このような場合には，おそらく地域での支え合いということをきちんと整えることで支援ができるだろうと思う。一方で，子ども自身の育てにくさ，関

わりにくさがあって，母親自身が不安定さをもっている場合にはやりとりに介入するという必要性が生じ，専門家を含めた親子の支援の提供ということを考えていかなければならない[8)]。このように，保護者の感じている育てにくさの要因が子どもの障害が疑われる場合には，地域での子育て支援ではなく，専門的な支援が必要となる。このことからも，既存の子育て支援の枠組みの中では育てにくさに寄り添う支援には限界があると思われる。

多くの場合，保護者からの相談がなければ乳幼児健康診査での気づきをもとに支援が行われる。そのため，育てにくさに寄り添う支援には母子保健が重要な役割を果たしているといえる。しかし，健診やその後のフォローについて地域間で差があるのが現状である。健やか親子 21 の調査では，乳幼児健康診査に対する満足度は 1 歳 6 ヶ月児 35.7%，3 歳児 34.0%といずれも低い一方で，育児支援に重点をおいた乳幼児健康診査を行っている自治体の割合は 91.8%となっており[7)]，育児支援に重点を置いているにも関わらず満足度は低くなっている。小枝(2013)は，現行の乳幼児健康診査の体制で発達障害の幼児に適切に気づくことは物理的に困難であることを指摘し，現行の体制の延長として 5 歳児健診を取り入れることは意味があると思われ，保護者が感じている育てにくさに寄り添う健診として期待されると報告していることから[9)]，乳幼児期に最も身近な子育て支援であると考えられる乳幼児健康診査をはじめとする母子保健サービスの充実が子育て支援の充実へと繋がると考えられる。

Ⅴ．今後の課題

本研究では自記式アンケート調査を行ったが，自由記述には無回答が多く，回答する保護者の手間となり，保護者の声を拾いにくかった。そのため，より詳しく保護者の困り感の内容を調査するにはインタビュー等での調査が求められる。また，座談会や問診及び活動中の雑談では自由記述項目に書かれていない内容も多く聞かれた。アンケート用紙に記入するという手間のかかる作業によって，保護者が実際に困っていること等の中から文章化しやすいものだけに限定してしまった可能性も考えられる。困り感レベルに関しては保護者の主観によるところが大きく，アンケート用紙にも明確な基準を示していないため，困り感が高いと判断する根拠も平均値を基準とするしかなく，筆者の主観によるところが大きい。また，質問項目について，日常的に子どもを育てている両親に代わって各教室や 5 歳児発達相談に保護者として訪れた祖母に対し，子育てサポートの有無や相談相手の有無を尋ねる項目は不自然であったため，配慮が必要であった。本研究では，調査対象を子どもに何らかの素因があると思われるグループへと絞っていることや対象数が少ないことから，対象群別や年齢別の傾向を把握するには難しい。同様の調査を 3 歳児乳幼児健康診査等の一般的な対象者へも実施すれば，得られた結果が対象地域や対象年齢による傾向であるのか，対象群による結果なのか比較することも可能であるだろう。

ふれあい教室及びらっこクラスでは，座談会の場が設けられ保護者同士で悩みを共有したり，スタッフからアドバイスをもらったりできるように工夫されている。また個別のアドバイスもされており，各教室の果たす役割は大きい。らっこクラスの困り感が他の群と比べて低くなっていることから，保護者が子どもの特徴を理解することは子どもの成長や発達に繋がるだけでなく，保護者が子育てに自信をもって取り組めるようになることにも繋がると考えられる。こうした支援が今後の子育て支援を充実させるためのキーワードとなるだろう。このような支援に積極的に取り組むことは，健やか親子 21 で指摘される乳幼児の健康診査の満足度の向上にも繋がるのではないかと考えら

れる。保護者は子育て環境に関する困り感もあるが，子どもの行動にどのように対応すべきか分からず困っている実態があるため，とりわけ危険行為や癇癪及び多動・衝動的に行動する等，集団参加を妨げるような行動に対する対応方法を保護者自身が獲得できるように支援していく必要があると言える。

おわりに

親子教室等の活動を通して子どもが変わっていく姿や試行錯誤しながら子どもを理解しようと向き合う保護者の皆様の姿を見て情報提供の重要性を感じた。本研究を通して得られた保護者の皆様が感じておられる育てにくさや困り感を基に，それらを軽減したり，改善したりするような情報を積極的に発信していく必要がある。また，育てにくさに寄り添う乳幼児健康診査についても検討されつつあることから，今後の子育て支援がさらに充実していくことを願っている。

謝辞

本研究に協力してくださった鳥取市中央保健センター及び鳥取市こども発達・家庭支援センターの皆様，アンケートに回答してくださった保護者の皆様，ありがとうございました。心より感謝申し上げます。

引用及び参考文献

1)保育小辞典編集委員会編，中川進．保育小辞典．大月出版,2006：10-11，100

2)ベネッセ教育総合研究所．第3回子育て生活基本調査(幼児版)．ベネッセ教育総合研究所，2008：1-41

3)永田雅子．軽度発達障害が疑われる子と親への早期介入プログラム構築のための研究．科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書，2011：1-5

4)田丸尚美，小枝達也．5歳で把握された発達障害児の幼児期の経過について．小児保健研究第69巻第3号，2010：393-401

5)今井充子，常盤洋子．我国の行政による子育て支援の視点と課題に関する文献検討．北関東医学61(3),2011：377-386

6)厚生労働省．社会保障・人口問題基本調査 第4回全国家庭動向調査．厚生労働省 http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/nsfj4/nsfj4_top.asp，2010

7)厚生労働省．健やか親子21におけるこれまでの指標の推移．第1回「健やか親子21」の最終評価等に関する検討会配布資料 http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/0000013575.htm，2013：1-14

8)永田雅子．子育て支援の枠組みでの家族支援．平成21年厚生労働科学研究費補助金障害保健福祉総合研究成果発表会報告書． http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/kousei/h21happyo2/index.html，2009

9)小枝達也．育てにくさに寄り添う乳幼児健診．発達障害研究第35巻3号，2013:213-219

(2014年6月6日受付,2014年6月26日受理)